

特集「人間中心のユニバーサル/ユビキタス・ネットワークサービス」の編集にあたって

金 群^{†1} 荒金陽助^{†2}

情報通信技術（ICT）の急速な進歩にともない、何時でも何処でも誰もが使えるユビキタスネットワーク社会のインフラが整いつつある。このような社会であらゆる人が ICT の恩恵を実感でき、安心して快適で便利な生活をしていくためには、高齢者、身障者、外国人を含む誰もが時間的、空間的、身体的制約、言語の壁を超えて、手軽に使いこなせる情報環境やユーザインタフェースが必要不可欠である。また、そのユーザインタフェースを介して扱う情報に対して、木に竹を接いだような不整合な利用形態を利用者に強制するのではなく、利用目的や利用者に適した処理を施すことで、情報を効果的・有機的に活用するシステムや機能を実現することが期待される。もちろん、これらユーザインタフェースや情報処理機構に供する適切な情報を収集する手段も重要となる。そのため、情報科学・工学、社会科学、認知科学、心理学、人間工学など異なる分野の研究者が連携して、従来の枠組みを超えた横断的で学際的な研究アプローチが求められている。

このような背景と問題意識をもとに、人間を中心にすえたユニバーサル/ユビキタス・ネットワークサービスについて研究成果をまとめる良い時期が来ていると判断し、本特集号を企画した。人間がテクノロジーに迎合するのではなく、テクノロジーが人間に適合するべきであるという人間中心の考え方や、ネットワークサービスはコンピュータやネットワークを人間に奉仕させるものだと位置づけるといったような認識を改めて促すような研究成果を期待した。そこで、人間の生活や情報の利用を助けるための様々な機能とサービスを実現する、協調基盤技術、グループウェア応用技術、各種のネットワークサービス技術、それらの技術を融合した学際的な研究開発ならびにそれらの社会的インパクトの分析など幅広い観点からまとめて社会に発信することを意図し、論文を募集した。

その結果、38 件という多数の論文投稿があった。特集号編集委員をメタレビューアとし、著者による論文修正期間を 1 カ月に短縮した以外は通常の論文誌の論文と同じ手続きで査読を行った。各論文は、論文誌の査読委員および「グループウェアとネットワークサービス研究会」の運営委員を中心に厳選された 2 名の査読者により審査された。その結果、最終の採録数は 15 件で、採録率は 39.5%となった。

採録された論文を次のように分類して目次を構成した。まず、ユニバーサルサービスをテーマとする論文が 4 件、次に、ユビキタスコンピューティングに関わる論文が 4 件、さらに、コラボレーションやレコメンデーションに関連する論文が 4 件、最後に、インタラクティブシステムに関する論文が 3 件となっている。医療福祉やプライバシー保護を目的とするユニバーサルネットワークサービス、ユビキタス関連技術および環境保護や観光支援といった社会情報システムへの応用、創造活動やコミュニケーション支援、情報推薦、さらに、視覚や嗅覚を利用したインタラクティブシステムなど、幅広く多彩な論文が採録されている。本分野において、異なる分野の枠組みを超えた学際的な研究アプローチが重要性を増していることを示しているといえる。

最後に、本特集号を企画する機会をいただいた論文誌編集委員会、数多くの優れた論文を投稿していただいた著者の皆様、短期間の査読に協力していただいた査読者の皆様に感謝したい。本特集が学際的なアプローチによる本分野での研究活動の活性化の一助となり、人間を中心にすえたグループウェア・ネットワークサービス分野の発展に寄与できることを期待している。

「人間中心のユニバーサル/ユビキタス・ネットワークサービス」特集編集委員会

- 編集長（ゲストエディタ）
金 群（早稲田大学）

- 幹事
荒金陽助（NTT）

- 編集委員（敬称略、五十音順）
市村 哲（東京工科大学）、井上智雄（筑波大学）、上杉 繁（早稲田大学）、鶴飼孝典（富士通研究所）、岡田謙一（慶應義塾大学）、岡本昌之（東芝）、緒方広明（徳島大学）、葛岡英明（筑波大学）、國藤 進（北陸先端技術大学院大学）、爰川知宏（NTT）、関 良明（NTT）、垂水浩幸（香川大学）、樫山淳雄（東京学芸大学）、星 徹（東京工科大学）、三樹弘之（沖電気工業）、宗森 純（和歌山大学）、山上俊彦（ACCESS）、吉野 孝（和歌山大学）

†1 早稲田大学

†2 NTT